

Y A S U G A W A

野洲川



の環境



YASUGAWA

yasugawa
ecosystem

野洲川の

環境

国土交通省
琵琶湖工事事務所

野洲川とは

野洲川は、鈴鹿山系の御在所岳を水源とし、大山川や柚川などと合流しながら琵琶湖に注いでいます。

河川延長は本川65.3km、総延長314.5kmで、流域面積は382.3km²(琵琶湖南湖の広さの約7倍)に達します。

昭和62年には、下流部に新しく放水路が完成し、昔から“暴れ川”と言われ洪水被害の絶えなかった野洲川は、安全な川にうまれました。



野洲川の昔

野洲川の流域は、保水力の少ない森林が多かったこともあり、大雨のたびに多量の土砂が下流に流され堆積し、天井川となって洪水が絶えませんでした。



(昭和28年災害状況)



(昭和28年被災応急締切工事)

放水路の建設

南流と北流の2つの川に分かれていた下流部に、大規模な放水路を建設しました。

工事は短期間で集中的に行われ、想像以上の軟弱地盤を克服する困難な工事でした。



(野洲川下流部と放水路建設位置)



(野洲川放水路の工事風景)

放水路の完成

野洲川放水路は、昭和46年9月に工事が開始され、昭和54年6月に通水、昭和62年3月にほぼ完成しました。



(落差工付近より琵琶湖を望む)

落差工は、放水路が建設された際に、放水路の取り付け部で上流側と下流側で3.5mの落差が生じたことから、建設されたものです。



落差工

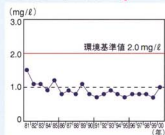
石部頭首工は、下流の水田地帯への農業用水を取水するため、建設されました。



石部頭首工

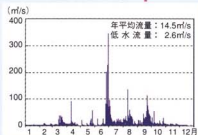


BOD値の年次変化



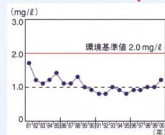
1980年代に徐々に水質の改善がみられ、近年は1.0mg/ℓ未満の値でほぼ安定しています。

日平均流量(平成11年)

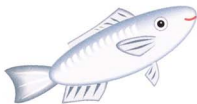


上流の石部頭首工にて農業用水が取水され、普段の水量は少なくなっています。梅雨から台風シーズンにかけて増水がみられます。

BOD値の年次変化



1980年代に徐々に水質の改善がみられ、近年は1.0mg/ℓ程度でほぼ安定しています。



1

河口付近



ヨシ(アシ)

草丈3mに達する。岸辺や中洲など水辺に群生する。

夏秋



ヤナギタデ

湿ったところに群生するタデの仲間。噛むと強烈な苦味がある。

夏秋



カムリカイツブリ

河口部や琵琶湖岸の広い開放水面で漂う様をみることができる。

冬春



ウシガエル

体長20cmにもなる大型のカエル。水辺の植生帯に生息する。

春夏秋



イサザ

琵琶湖固有種で、春に湖岸や河口部に集まり産卵する。

春



ゲンゴロウブナ

琵琶湖特産種である。全国の釣り堀や湖沼に放流されている。

通年



オオクチバス

通称ブラックバスで、旺盛な食欲で他の魚を食べる。外来種。

通年



ブルーギル

オオクチバスと同様に、他の魚を食べる外来種。近年、増加。

通年



スジエビ

水草の間などに生息している無色透明なエビ。

通年

2

落差工～服部大橋付近



ツルヨシ

ヨシに似た植物で、地表面に多数の根茎を伸ばしている。

夏秋



カワウ

野洲川周辺に数多く飛来する鳥。水中に潜り魚を食べる。

通年



カワセミ

近年、都市部の河川でもよく観察されるようになった。

通年



コサギ

野洲川では普通にみられる鳥で、足先が黄色であるのが特徴。

春夏秋



トノサマガエル

河川敷の水たまりや草地に生息している。春に産卵する。

春夏秋



チョウセンカマキリ

セイタカアワダチソウなどの草原に普通にみられるカマキリ。

夏秋



カブトムシ

河川敷に点在するヤナギの樹液に集まってくる。

夏



ウツセミカジカ

砂礫底に多い魚で、水生昆虫などを食べている。

秋冬春



ビワマス

琵琶湖固有種。秋に川をのぼって産卵し、稚魚は翌春降湖する。

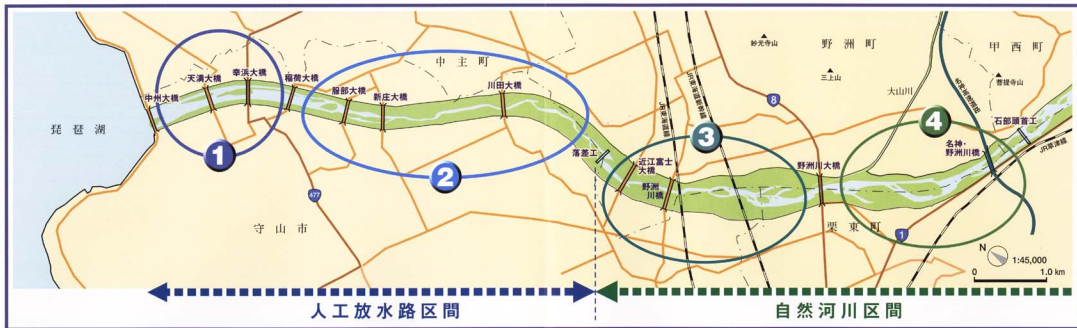
秋春



野洲川 生き物地図

石部頭首工より下流部の野洲川では、川幅が300～400mと広く、瀬や淵、中洲や河川敷、ワンド、タマリなど複雑な環境を有しています。特に落差工より下流は人工放水路であるにもかかわらず、通水後20年が経過し、上流の自然河川区間に劣らない多様な環境が形成されています。

そのため、生き物の生息場所として野洲川は豊かな川となっており、様々な水辺の植物群落のほか、魚や貝、鳥や哺乳類、昆虫類などをみることができます。

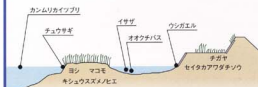


動物の生息環境・模式図

1 河口付近

野洲川の河口に近く、大きな中洲と広い開放水面が特徴である。

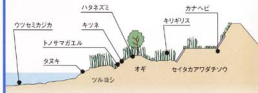
河道と高水数は人工護岸によって分断されている。高水数は、人工裸地やセイタカアワダチソウ群落などの荒地となっているが、中洲には湿生草が成立しているほか、広い水面が存在する。



(右岸模式断面)

2 落差工～服部大橋付近

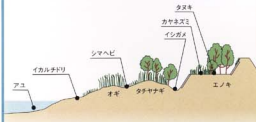
高水数はセイタカアワダチソウ群落などの荒地地となっているが、低水路内には、中洲や寄り州、ワンドなどの環境が形成され、自然裸地のほか、ツルヨシやオギ等の草地在り。



(右岸模式断面)

3 JR橋梁付近

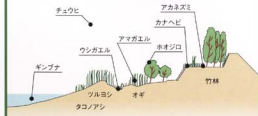
高水数の一部は公園利用されているものの、エノキやムクノキの樹林がみられるほか、低水路内にはオギやツルヨシ、タチヤナギ等の植生が成立している。



(右岸模式断面)

4 名神橋梁付近

高水数は、クズに覆われた範囲が広いものの、竹林が面的に成立している。低水路内には広大な自然裸地が存在するほか、ツルヨシやオギ、セイタカアワダチソウ等の草地在り。



(右岸模式断面)



3

JR橋梁付近



オギ

河川敷に広く分布する植物で、ヨシより若干乾燥した所に生える。

夏秋



カワラヨモギ

主に河川敷の砂地に生育する植物で、所々で群落をつくっている。

夏秋



イカルチドリ

水辺の砂礫地で餌を採る様子がよく観察される。

通年



カヤネズミ(葉)

河川敷の草地でよくみられる球状の果。オギなどの葉が使われる。

通年



エゾイナゴ

イナゴの仲間、河川敷の草地にて確認される。

夏秋



ゴマダラカミキリ

河川敷のヤナギやクワなどにやって来る。日本全土に分布する。

夏秋



ハグロトンボ

カワトンボの仲間、羽が黒いのが特徴。岸辺の植物帯でみられる。

春夏秋



アユ

琵琶湖で育ったあと、春頃に川を上る。釣りの対象として有名。

春夏秋



トウヨシノボリ

夏頃から川を上り成長する。地域によって様々な変異に富む。

通年

4

名神橋梁付近



竹林

マダケやモウソウチクで構成され、高水敷などにみられる。

通年



ツチアケビ

竹林の中に点在しており、秋になると赤い実を多数つける。

夏秋



カワラハハコ

河川敷の砂礫地に特徴的な植物で、野洲川では点在してみられる。

夏秋



タコノアシ

タコの足のような花をつける植物。水辺に点在してみられる。

夏秋



ホオジロ

河川敷の草地でみられる。さえずりをよく聞くことができる。

通年



カナヘビ

河川敷の草地や藪で普通にみられるトカゲの仲間。

春夏秋



ハラビロカマキリ

河川敷に点在する樹木の葉上や幹などで観察される。

夏秋



ギンブナ

淀みや水草帯などに生息し、最大30cmほどに成長する。

通年



カマツカ

砂地の川底に生息している。ユスリカや藻などを食べる。

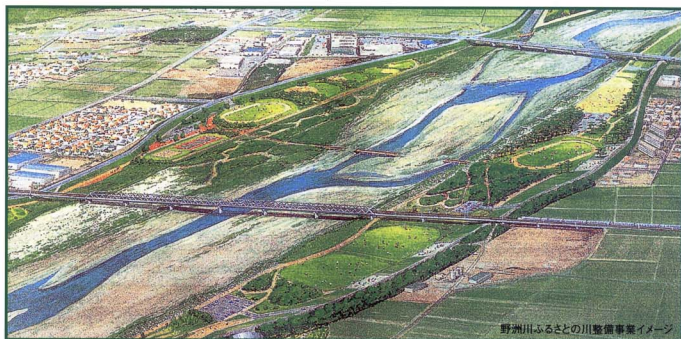
通年

平成7~11年の河川水辺の国勢調査を参考に作成。記載した動植物は、代表的なもの。なお、各種の季節表示は、最もよく観察できる時期を示した。

これからの野洲川

生き物に配慮した川づくり

野洲川では、治水上の安全性を確保しつつも、様々な生き物が生息できる自然豊かな川づくりを目指し、堤防の傾斜を緩くしたり、水辺林の植栽や養育を実施するなど、いろいろな配慮を行っています。



地域との共存

近年、失われた人と水との関わりを取り戻し、地域と一体となって治水や自然環境について考え、共存を図る様々な取り組みが行われています。



(河畔林の植樹風景)

野洲川は、単に治水や利水機能のみならず、生き物の生息場所としての機能、さらには親水機能を備えた豊かな川として、将来の世代に受け継がれていくことを目指しています。

国土交通省 近畿地方整備局
琵琶湖工事事務所

平成13年3月発行

〒520-2279 滋賀県大津市黒津4丁目5番1号
TEL 077-546-0844 (代表)

ホームページ <http://www.kkr.mlit.go.jp/biwako>